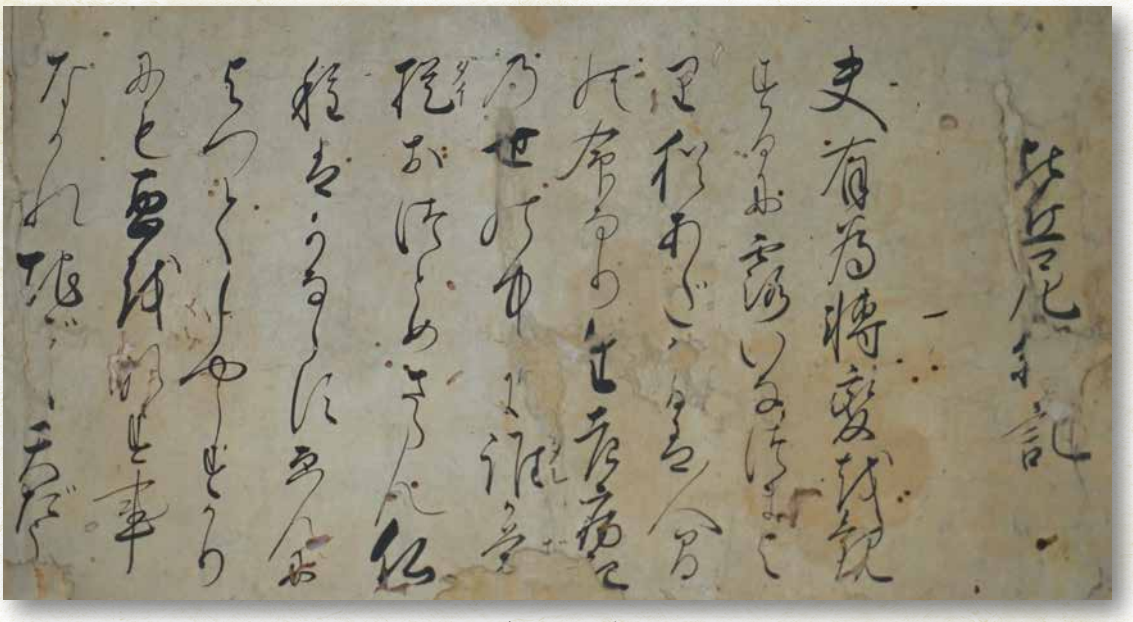
ISSN-1883-1931

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニューズ

No.53　AUTUMN 2018



『比丘尼縁記』

目　次

メッセージ

古典籍を開くために……飯倉　洋一　1

研究ノート

博論を摘まむ……クリストファー・リーブズ　2

古典ＡＲの紹介 – 展示会での新しい鑑賞方法 –……北村　啓子　4

書評

ブックレット〈書物をひらく〉4
　小山順子著『和歌のアルバム 藤原俊成 詠む・編む・変える』……舘野　文昭　6

エッセイ

マレガ・プロジェクトでの共同研究と、バチカン・イタリアからの招聘旅程を終えて……高見　純　7

トピックス

ないじぇる芸術共創ラボ アウトプットイベント2件開催……有澤　知世　8

和歌ワークショップ【X】2018夏イリノイ……神作　研一　9

特別展示 祈りと救いの中世……海野　圭介　10

〈新収〉庵逧巌旧蔵資料の紹介……神作　研一　10

中高生向けの講演会・展示を国立国会図書館国際子ども図書館とのコラボで開催！……11

第42回国際日本文学研究集会（プログラム）……12

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況……14

古典籍を開くために

飯倉　洋一（国文学研究資料館運営委員、大阪大学大学院教授）

日本古典籍の調査・収集・公開・研究の総合的研究機関として、国文研は着実な発展を遂げてきたと言えよう。和古書そのものの収集も進み、今や日本有数の和古書所蔵機関となった。

国文研は、数年前から「歴史的典籍NW事業」を展開し、30万点の歴史的典籍の画像公開を目指している。それを基幹事業として、国際共同研究・異分野融合研究など様々な新しい研究に挑戦し、情報系研究機関・研究者との連携にも積極的である。とはいえ、あくまで一貫して日本古典籍に軸足を置いていることは評価してよい。

それでは、日本古典籍の調査・収集・公開・研究には、どれほどの価値があるのだろうか。我々研究者には自明の問いだが、一般の方に国文研の事業を理解していただくには、「日本古典籍とは何か」を知っていただく必要がある。その努力も国文研は怠っていない。できる限りのことを、少ないスタッフと少ない予算で懸命にやっているのは敬服に値する。にもかかわらず、残念ながら国文研の予算を増やそうなどという話は聞こえてこない。むしろ、国文研が現在の事業をどう継続するかが実際問題としては喫緊の課題なのである。それには、国文研が提供している古典籍を、研究者以外の方々にも、広く有意義に利用・活用していただく顕著な実績をたくさん挙げることが必要である。

昨年度から始動している「ないじぇる芸術共創ラボ」は、芸術家や翻訳家とともに、古典籍を用いて新しいアートを創成し、魅力的な翻訳を発信するという、旧来の国文研の活動からは考えられない異色の事業である。ただ、この事業が順調に進展しているのかどうか、やや見えにくいところがある。「古典インタプリタ」という、国文研の内と外を繋ぐ仲介的役割を果たす特任助教が存在するが、不安定な身分の割に、与えられたミッションはあまりにも重い。前例のない任務だけに、負担過重にならないよう配慮されてしかるべきだろう。「ないじぇる芸術共創ラボ」を今後とも継続発展させていくためには、いくつもの戦略を繰り出していかなければならないし、宣伝告知も重要である。しかし、国文研全体で取り組んでいるというイメージがなければ、その効果も薄い。「ないじぇる芸術共創ラボ」の全館的取り組みに期待する。全員が前を向けば、物事というのは自然に加速するものである。

さて、芸術家・翻訳家に古典籍を使って創造的な仕事をしていただくのは、その先に、古典籍への一般市民の関心を高めるという目的があるだろう。しかし、一般市民の方が古典籍に興味を持つには、二つの壁がある。いうまでもなく、「くずし字」と「古文読解」である。

くずし字については、くずし字学習を普及支援して「読める人をふやす」という方法と、翻刻して「テキストデータで提供する」という方法がある。前者については百人一首を用いた講座を開催するなど、後者についてはくずし字OCRを凸版印刷等と共同開発するなど、国文研も熱心に取り組んでいる。しかし、そう簡単にすべてのテキストを機械が読めるようにはならない。そこで人海戦術による翻刻が考えられるのだが、莫大なコストがかかるし、人材確保が困難である。

そこで是非、検討していただきたいのが、クラウド・ソーシング翻刻である。京都大学の古地震研究会が運営する、災害史料のオンライン翻刻プロジェクト「みんなで翻刻」は、市民4400人以上が参加し、500万字以上の翻刻を、1年8ヶ月で達成するという実績を上げている。当初は思いもかけなかった数字である。参加者の中には相当なくずし字解読能力を有している人もいて、他の人の翻刻ミスを修正してくれるので、全体としてはまずまず正確な翻刻が出来上がっているようである。ここに参加している人々は、報酬ゼロで大きな社会貢献を果たしているのである。

校訂方針の統一とか、一字たりとも不正確であってはならないなど、学問的な「正しい」意見はわかるが、「みんなで翻刻」が教えてくれるのは、どういうシステムにしたら、市民が古典籍に関心を持つようになるのかということである。テキストデータ化の本来の目的は市民が古典籍に関心をもってもらうことなのだから、多数の参加者を集めた時点で、目的は半ば達成されていると言えるのである。研究者にとっても、95パーセント以上の精度でテキストデータが存在するとしたら、ありがたいはずである。テキストデータはトライアル版として公開すればよい。わくわくするようなチャレンジではないだろうか。

もうひとつの壁は、「古文読解」であるが、現代語訳もまた同様に募る方法が考えられるであろう。さらに英訳もまたしかりである。

ここから先は夢想になるが、現在の古典籍データベースを、市民参加型のシステムに改良し、文献の画像を中心に据えて書誌データ・翻刻データ・現代語訳・英訳をはじめとする多国語訳が関係づけられ、必要に応じて参照できるくずし字学習アプリ、くずし字OCR、古語辞典、古語英語辞典、書誌学用語辞典などが組み込まれているというような、古典籍活用のための総合的ポータルサイトを国文研が主体となって運営したらいかがだろう。もちろん、そのためには、なぜ古典籍は面白いのか、これを問い続け、発信し続けなければならないことを忘れてはならない。市民が参加するシステムを作り上げれば、そこに古典籍に関する研究者と市民との交流や、情報交換の場も自然にできるだろう。

博論を摘まむ

クリストファー・リーブズ（早稲田大学文学学術院講師）

今年の三月初旬に博士論文をようやく書き上げた。国文研で勤めながら書いたものだから、研究書や先行論文を調べるのにまったく苦労せず、ほしいものはほとんど全部館内の図書館にあった。経緯こそ語る余裕はないが、博士号は日本の大学ではなく、米国のコロンビア大学で取ったものである。カナダ人である僕が米国の大学に籍を置きつつ、日本の研究機関で仕事をしながら博士論文を書いたとは、まさに国際的な作業であろう。しかも米国の大学に提出する論文である以上、英語話者に日本文学を紹介するのであるから、もちろん英語で書かなければならない。漢詩を多く扱った論文であり、タテの漢文をヨコの英文に移し変えるだけで意外と発見が多く、翻訳を通して漢詩に対する自分なりの新しいひらめきが現れた。

博士論文は平安初期の漢詩に注目し、漢詩がはじめて披露された公的な場とその社会的機能を分析しようとするものである。前半は嵯峨天皇の漢詩と宮廷文壇を、後半は嶋田忠臣と菅原道真の漢詩および天皇や官僚との上下関係などを紹介する。公的な場とは、例えば嵯峨天皇が在位中ほぼ毎年に主催した九月九日の重陽宴や七月七日の七夕の宴の如く、天皇と臣下が一緒に酒を飲んだりその場に相応しい漢詩を披露したりする宴会をさす。社会的機能とは、その場で披露された漢詩の作者が詩作を通じて何をしようとしたかをさす。

簡単な例をあげよう。嵯峨天皇が重陽宴で菊の花をひたすらめでる漢詩を披露する。詩の内容をすなおに理解し、嵯峨天皇は菊の花をめでていると解釈してもよいが、天皇は決して菊の花をめでるために詩を作ったのではない。菊の花をめでる事によって、長寿を齎す菊花酒を褒め、その菊の花が今年もおりよく咲いてくれた事まで祝っている。その裏に更に重要な意図が託されている。菊の花が咲いたのは単なる自然現象ではなく、むしろ天地――嵯峨天皇は孟子に倣いこれを「造化」といっているが――と合体した天皇の恩徳によるめでたい珍事である。つまり、菊の花をめでることは、ただちに嵯峨天皇本人の徳を褒める事になり、宮廷における最高支配者たらしめる資格を主張している。嵯峨天皇はこの詩作を披露することによって、「俺は有徳な天皇だ。君等の長寿を齎す菊花酒はまさしく俺の徳によってやっと実現されたものだよ。俺に従え」と臣下の忠心を婉曲的に懇願している。

嶋田忠臣も菅原道真も嵯峨天皇と同じく、詩の中に様々なことを託している。宮廷における地位を確保したり昇級を願ったりし、あるいは政敵を責めたり同輩を労わったりする。当時の文人たちにとって、詩作はただ鑑賞するための美文ではなく、実際の生活に何らかの影響を与える一手段として、莫大な期待を込めていたものであった。当時の漢詩は公的な文学であるからこそ、宮廷における上下関係およびそれにまつわる経済状態を大きく左右する実用性の高い文学であった。

上述した事柄は別に新しい見解ではない。前近代における文学と権力の密接な関係は東西の先哲の指摘してきたところである。もちろん、先行研究から肝心な論説を絞り出し簡潔に纏め、英語圏の学者――特に日本文学と縁のない学者――に紹介することも博論が担うべき役割の一つであろうが、新しい論説を学界に提供することも期待される。僕の博論の場合は、漢詩と宮廷政治との関係を強調しながら、漢詩の内容に焦点を合わせ、詩人は具体的にどのような比喩や修辞を用いているのかを明らかにしようとした。ここで研究結果を細かく述べる訳にはゆかない。むしろ博論そのものを読んでもらった方がよかろう。コロンビア大学の Academic Commons に公開されているので、簡単にダウンロードできる（https://academiccommons.columbia.edu/catalog/ac:x0k6djhb06）。ただしあまりにも長い論文になってしまったので、要点だけ述べよう。

漢詩の内容――比喩や修辞――の細かい分析はどうしても出典論になるものが少なくない。出典論はそれなりの価値はあるが、英語圏の学者に紹介するにあたっては、もっと大きな視点から語らなければならない。中国文学も日本文学も知らない学者を想定すれば、あの細かい出典論はやはりきびしいものであろう。それに加えて米国の大学に提出する博論は出版することを前提にして書くものであるので、一般読者の興味を損なう内容はできるだけ避けた方が望ましい。そこで、僕はジャンル (genre) と詩におけるペルソナ (poetic persona) という二つの大きなテーマから平安初期つまり九世紀の漢詩を眺め直した。極めて大ざっぱな言い方ではあるが、当時の詩人は漢詩を披露する場とその場に列座している聴衆 (audience) に応じて、詩作に託している期待や願望をより効果的に実現させるため、もっとも適切なジャンルとペルソナを意識的に選んで作っていた。従って、詩人は異なった場や聴衆に合わせて、ジャンルやペルソナを要領よく変えていた、という結論を出した。

嶋田忠臣は渤海からやってきた使節の接待役を務めた経験がある。話している言葉が通じなくても筆談はできる。そこで忠臣は幾つかの漢詩を渤海使に寄こした。僕は忠臣の詩を四年に亘って吟味し鑑賞してきたが、ジャンルやペ

ルソナの視点から見直してはじめて発見した事は少なくない。渤海使への漢詩はジャンル的に言えば餞別詩の要素が著しい。渤海使が日本を離れ大海を渡り母国に戻ることを考えれば、餞別詩というジャンルを選んだのはもっともであろう。ただそれだけではない。これらの詩作をジャンルの視点から見詰めれば、餞別詩とは別に、艶詩というジャンルの要素も顕著である。艶詩といえば『文選』とほぼ同じごろに編纂された『玉台新詠』の漢詩集を想起する。艶詩の作者はたいてい男性であったが、遠く離れた夫を寂しく恋慕する婦人というペルソナを借りて閨怨の情を詠む。婦人が最愛の夫を偲ぶ以上、性愛的或いはそれに匂わせる艶めかしい文句を織り込んでいる。忠臣もまた婦人のペルソナを取り入れ、渤海使に寄こす漢詩に餞別詩と艶詩と、二つのジャンルの特徴的な要素を縫い合わせ、独特な雰囲気を醸し出している。

忠臣がここまで工夫しているのは単なる文芸の遊びではない。漢詩の読み手となる渤海使の社会的地位と、今後における日本の宮廷との政治的関係を配慮した上に作りあげた作品である。典型的な餞別詩であれば、遠く離れて行く相手を送る気持ちを述べればよい。そこに艶詩的な要素を織り込むことによって、餞別詩にない男女の密な関係までほのめかせる。忠臣は艶詩に見える婦人のペルソナを通して、渤海使と特別な信頼感を育てようとしているわけである。そして、艶詩だからこそ、忠臣と渤海使すなわち日本と渤海の両宮廷との関係を平等化しようとしている。例外はあっても餞別詩の場合は上下関係が前提となっているものが多い。上の者が下の者を餞別するのが通例であり、嵯峨天皇が臣下を餞別するのもその典型的な詠み振りである。艶詩になると、上下関係が曖昧になってくる。忠臣は日本と渤海とのこれからの政治的交流を思いやり、できるかぎり渤海使の機嫌を取るため、艶詩の要素を取り入れ上下関係を敢えて意識させず、恋人同然な信頼感を培おうとしている。忠臣の渤海氏への漢詩をジャンルの視点から見直せば、詩人、ジャンル、ペルソナ、聴衆、宮廷の複雑な関係が少しでも明らかに見えてくるのであろう。嵯峨天皇にしても菅原道真にしても、同じことが言える。

博論の方針はおおむね上述した通りである。口頭試問の席で先生方にいろいろと指摘されたが、論文の出来不出来はともあれ、漢詩をジャンルとペルソナと二つの大きな視点から眺めるという読み方は賛同された。

繰り返しにはなるが、博論は英語で書いた。日本漢詩の英訳が収録されている英語の研究書や論文を幅広くさぐってみた結果、嵯峨天皇の漢詩の英訳は数種しか見当たらないので、論文の最後に参考資料として嵯峨天皇の勅撰漢詩集に載っている漢詩八十八首の英訳と注釈を付した。見ればすぐに気がつくであろうが、僕の訳は通常の訳の長さより倍以上もある。直訳を嫌う僕は、なるべく英語の詩としても読みやすいように、本文の行間にあるニュアンスを付け加えたり、ややこしい表現を簡単に書き直したり、さまざまな工夫を試みた。勝手だと言われれば確かに勝手であろうが、その方が詩としての高尚な風格と全体的な意味が訳に反映されるのであれば、別に文句はなかろう。いくら博論と言えども、あくまでも草稿のようなもので、嵯峨天皇の漢詩の英訳に間違いや誤訳が混ざっているかもしれないが、それにしても随分楽しく読めるかと思う。是非ともダウンロードして頂きたい。間違いを見つけもっと適切な訳を作ってくれれば、僕の仕事が減ってありがたい。

博論の前半が嵯峨天皇で、後半が忠臣と道真の漢詩を論じているが、その間に少し変わったものを挿んでいる。嵯峨天皇と同じく九世紀に活躍していた英国のアルフレッド大王(849-899)との比較的研究に挑戦してみた。アルフレッド大王は嵯峨天皇と同様に宮廷に文学を復興させ、嵯峨天皇が主張する文章経国——広い意味での文学で国家（朝廷）を治める——のような理想をもって実行しようとした。アルフレッド大王も自ら詩を書いた。嵯峨天皇と大王の詩を比べる事によって、思いがけない発見が幾つかもあった。しかも、これらの発見はほぼ例外なく、嵯峨天皇の漢詩を英訳してアルフレッドの詩と並べてからやっと気がついたものである。漢詩をそのまま漢詩として見るのと、訳して英語の詩として見直すのと、自然と見方が一変して新しい読み方が生まれてくる。

翻訳という作業の最終目的は訳を作る事と思われるが、それより研究の過程或いは研究の手段としての翻訳の価値が高い。平安初期の文人たちが漢詩を披露した際に実際にどういうふうに朗読したかは分からない。当時の日本に入ってきた中国語の（ある地方の）発音で直読した可能性がなくはないが、おそらくは訓読を通して詠み上げた。考えてみれば、訓読も翻訳の一種類にすぎない。英訳と言え、訓読と言え、翻訳を通して漢詩を理解しながら見直す作業は古今ともさほど隔たりはないと思う。

古典ＡＲの紹介 – 展示会での新しい鑑賞方法 –

北村　啓子（国文学研究資料館准教授）

ＡＲ（Augmented Reality: 拡張現実）の言葉を聞いたことはあるでしょうか？社会現象にもなったポケモン Go などスマホゲーム、観光地での情報ナビや広告などで見かけることも多くなった。スマホをかざすとキャラクターや恐竜などデジタル情報がカメラを通して見ている現実世界の中に現れる技術である。では、「古典」と「ＡＲ」では何を想像しますか？

古典資料・史料を対象にしたデジタル展示に次の点に重きを置いて取り組んできた。

1．原資料の高品質画像を高い再現性（リアルな画像）で沢山見せる
2．一般の人は読めない資料も翻刻・翻訳データを使い内容理解を助ける
3．専門家の知識、最新の研究成果、展示の意図などの解説を多種メディアデータを使って伝える

デジタル展示は独立したコンテンツだけでなく、展示資料を見ながら原物とデジタル情報相互に補完しながら鑑賞を楽しむことを支援したいと考えた。デジタル画像上には任意の場所に自由にリンク情報を付与できるが、展示資料自身に付与することは不可能である。そこで視たいところをかざしたカメラの映像を検知すれば（AR の画像マッチング技術を利用）、関連するデジタル情報を提供できると考えた。あたかも原資料にデジタル情報へのリンク情報が貼られているかのように。目前の展示資料を「現実」と捉え、それを拡張し、見えない頁・肉眼で見る原資料よりリアルな画像、翻刻・現代語訳、専門家の解説など様々な知的情報を提供するのである。これが古典資料とＡＲとの出会い。

昨年秋の特別展示「伊勢物語のかがやき - 鉄心斎文庫の世界 -」から本格稼働している。それ以前3度特設コーナーで「お試し古典ＡＲ - デジタル画像をかざす -」試行実験を重ねてきた。直近の特設コーナー「淀藩・稲葉家のアーカイブズ」で初めて全展示史料をガラス超しにかざして全頁・全巻画像や解説を見られるようにした。毎回趣向を凝らし、展示内容の理解を深める、そしてＡＲらしいコンテンツを制作してきた。代表的なものを紹介する。

⌑　デジタル単眼鏡 - 屏風原物と –

大型の屏風、襖絵などガラス越しで遠く、詳細を視られないことは多い。単眼鏡（ギャラリースコープ）で拡大して見るような鑑賞方法を実現したいと考えた。視たいところにスマホ・タブレットを向け高精細デジタル画像を原物と重ねて、また手元で観ることを可能にした。

図録 [1]　pp 6, 7

⌑　挿絵の現代語訳・英訳

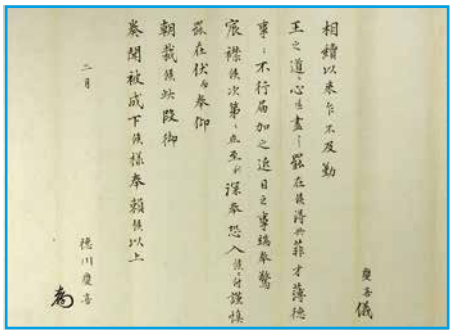
挿絵に描かれた場面の物語を現代語訳・英訳で聴く、読む。ナレーションはＡＩコンピュータが読上げている。

図録 [1]　pp 8, 9 下 , 10

⌑　直接かざしてみましょう（前出の直近特設コーナー）

⌑ AI が語る歴史上の事実『届けられなかった徳川慶喜の願書』

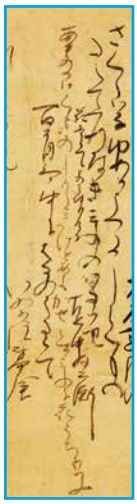
史料に記された歴史的事実の現代語訳をＡＩコンピュータが読上げる。上記展示史料を直接でも、モニタ表示された史料画像でも、どちらでも聴ける。



⌑ 明治時代の世界旅行『世界國盡』福澤諭吉訳述

展示原本の地図にくずし字で書かれた明治時代の国名を探してかざすと、その国を説明した挿絵（明治の人が見た各地域の様子）が現れる。

⌑ ここ何て読むの？（翻刻表示）『新古今和歌集草稿』



かざした和歌の翻刻テキストが表示され、原本のくずし字と並べて読むことが可能。くずし字の読めない方も読める。

⌑ 宿場ハンティング（東海道五十三次情報）

⌑ AR ガイド

展示キャプションをかざして展示解説を聞いたり読んだり。常設展用の制作を企画中。

⌑ 帰宅後の楽しみ

持ち帰った図録の印刷写真で同じＡＲを楽しめる。ご家族・お友達と一緒に。

古典資料・史料は文化遺産（文化財）でもあり何より保護・保存が重要で見ることのできる機会が少ないものが多い。また綴本は物理的に、巻子本は展示スペースの制約から全ての展示は不可能であり、それをデジタル画像で補完することは重要な意味ある展示手法である。急速にスマホ・タブレットのディスプレイが高密度化・高解像化し、人間網膜の画像分解能力を超えたとも言われている。日常的に身の回りにある情報端末で高品質画像をリアルに再現可能となり、展示鑑賞の仕方を大きく変えることが可能になった。また個々の情報端末にデジタル情報が表示されるので、個人の興味に合わせたガイドが可能でもある。視たいところに端末を向けるだけでいい。更にデジタル単眼鏡は、肉眼の人間能力を拡張（AH：Augmented Human）したとも言えるだろう。このような観点からも更に新しい展示鑑賞手法を開拓していきたい。許されるものは原本を直接、物理的制約のあるものは代りにデジタル画像をかざして、鑑賞を楽しんでいただけると幸いである。

今年の特別展示「祈りと救いの中世」が10月15日から始まる。新しい趣向の古典 AR がお待ちしている。スマホに現れるデジタル情報も原資料と一緒に見るからこそ！である。8Ｋモニタや4Ｋモニタ複数台連結した巻子のデジタル展示も会場でないと見られない美麗さ、迫力がある。是非スマホ持参でご来場を。

古典 AR を含むこれまでのデジタル展示の公開を始めた。
https://www.nijl.ac.jp/koten/DTenji
過去の展示での古典ＡＲの内容は [3] を、最近・今後の展示での内容は SNS 情報を参照されたい。

Facebook:　@nijlkokubunken2
twitter:　@nijlkokubunken

本稿 図中の青枠（図録の頁番号または原本写真を掲載）の印刷写真を使って、展示会での古典 AR を体験できる。アプリをダウンロードして試されたい。

QR コード
iPhone/iPad,
Android 共通

アクセスログによると一番人気は業平君である。一緒に自撮りも可能。お試しあれ。

脚注
[1] 特別展示『伊勢物語のかがやき - 鉄心斎文庫の世界 -』図録，http://id.nii.ac.jp/1283/00003373/
[2] 特別展と古典ＡＲの紹介記事
HIGHFLYERS: http://www.highflyers.nu/blog/00034
立川経済新聞 : https://tachikawa.keizai.biz/headline/2544/
[3] 古典資料・古文書の展示におけるＡＲ技術の利用 –≪古典ＡＲ≫の紹介 –，国文学研究資料館紀要第44号（2018.3）カラー版 : http://doi.org/10.24619/00003605

ブックレット〈書物をひらく〉4

小山順子著『和歌のアルバム　藤原俊成　詠む・編む・変える』

舘野　文昭（国文学研究資料館機関研究員）

和歌の本文は必ずしも固定的なものであるとは限らない。様々な理由から、一つの和歌に複数のヴァージョンが存在する場合もある。無論、和歌は僅か31文字の文芸であるから、ヴァージョン違いといっても、その異同は些細なものであることが多い。けれども、その些細な異同から見えるものも少なくないのである。本書は藤原俊成（1114～1204）の和歌について、複数のヴァージョンを持つものを取り上げてその差異について追究することで、「最善を求める俊成の創作の過程をたど」ったものである。俊成は第七番目の勅撰和歌集である『千載和歌集』の撰者であり、和歌史上に燦然とその名を輝かす巨星であるが、残存資料面からこのような考察をするにあたっての格好の素材であるとのことである。

本書は三章から構成される。「一　久安百首」では、久安六（1150）年、崇徳院主催の応製百首である「久安百首」を取り上げている。「久安百首」には原型である歌人別本のほかに、開催から三年後、崇徳院の命により俊成の手で編纂された部類本が現存している。両者の間で異同の見られる俊成歌を取り上げて、俊成の本文改変の意図を具体的に考察している。20頁以下の「月冴ゆる」から「冴ゆる夜の」への改変に関する考察では、歌人別本と部類本とにおける、前後に配列される和歌の違いから俊成の改編意図が解き明かされる。中等教育での扱われ方も手伝って、和歌は「一首」を独立した単位として鑑賞すべきものと思われがちであるが、前後の配列や歌群という観点を抜きにしてはその一首を真に理解することが出来ない、ということを教えてくれる考察となっている。またこの例からは、同じ和歌あっても、「最善」の本文は状況に応じて変わるものであるということも窺え、興味深い。

続く「二　長秋詠草と長秋詠藻」では俊成最初の自撰家集である『長秋詠藻』を取り上げる。『長秋詠藻』の諸本は二系統四類に分類することができ、章題中の「長秋詠草」とはそのうち俊成手控え本の系統（一類本）の本のことである。この手控え本と守覚法親王へ献上した系統の本（二～四類本）との本文比較から、俊成の創意が探究される。そして「三　俊成家集」は、俊成二度目の自撰家集である『俊成家集』を取り上げ、『長秋詠藻』との本文異同や配列の改編について論じている。和歌本文のみならず、詞書本文の変更の意図についても具体的考察がなされているのが注目される。猶、第二章は諸本と成立の問題に関する記述が過半を占めるが、簡にして要を得たまとめとなっており、有用である。古典文学を研究するに当たって、何故「諸本」の問題を避けて通ることができないのか、諸本比較から何がわかるのか、そのようなことを考える上で、参考になるモデルケースが提示されていると言える。

本書を通読することで、助詞・助動詞一語程度の僅かな本文の差異が表現世界を大きく変えることもあるという、和歌という文芸の特性についても実感することが出来る。やはり和歌の読解に当たっては、小さな異同も忽せにすることが出来ないものであると、改めて思わされる。猶、18～19頁で「つらきかななどて桜ののどかなる春の心にならはざるらむ」という歌について、第二句以下を「どうして桜は、のんびりとした春の心にならわないで急いで散ってしまうのだろうか」と訳し、「桜が散る前にこれから起こる未来のこととして、もしくは桜というものの一般論として嘆いていることになる」と説明している。しかし「らむ」は単なる推量ではなく一般的に「現在推量」と呼ばれるものであり、「現在の事態に対する推量を表す」（小田勝氏『実例詳解 古典文法総覧』、和泉書院、2015）助動詞である。そう考えると、この一首は未来のことでも一般論でも無く、慌ただしく散る桜を眼前にして「どうして長閑な春の心にならわないで急いで散ってしまっているのだろうか」と不審がる作中主体の個別的体験と読むべきでは無かろうか。

疑問点も述べたが、総じて本書の議論は具体的かつ明晰であり、一般読者に和歌の立体的な魅力をわかりやすく伝える優れた一冊であることは間違い無い。猶、タイトルの「アルバム」とは音楽アルバムのことで、「歌が詠まれた最初の時がシングルカット版だとすれば、歌人の個人歌集におさめられるのがベストアルバム、他の歌人たちの和歌も収める歌集を編纂するのがコンピレーションアルバム」とのこと。現代人にとって縁遠い和歌を身近に感じさせてくれる、秀逸な譬喩であると言えよう。

マレガ・プロジェクトでの共同研究と、バチカン・イタリアからの招聘旅程を終えて

高見　純（国文学研究資料館プロジェクト研究員）

2011年にローマ教皇庁バチカン図書館で発見されたキリシタン禁制に関わる史料群の調査・研究のために発足したのがマレガ・プロジェクトです。サレジオ会宣教師マリオ・マレガ神父が収集した膨大な史料群の整理・調査・研究と、成果の公表、及び史料のデジタル画像データベース公開の準備を進めてきました。

一昨年度から本プロジェクトへ関わる機会を頂いてきた筆者は、神父の遺した数多くのイタリア語メモの解読を通じて、史料群の構成を理解する一助となることを目指しています。プロジェクトへの参加によって、これまで閲覧してきた「歴史資料」の、閲覧可能な状態に至るまでの収集・整理・保存等の諸段階に関わることになり、より基層から史料の成り立ちを学ぶ機会に恵まれました。また、個人研究を行ってきた筆者にとって、研究中にプロジェクト・メンバーの先生方から即時的に得られる様々な示唆は非常に新鮮であり、共同研究の醍醐味を実感しています。

プロジェクトは、日本側とバチカン側の連携下で作業が進められています。2地域の共同研究は、イタリア史を研究する日本人研究者である筆者に、日伊両地域の史料文化の相違や、自身の研究の立ち位置を再確認させてくれます。今年2月には、これまで構築されてきた史料保存の為の技術交流を礎に、災害時のアーカイブズを巡って２地域の研究者が議論を深める場が持たれました。共に災害国として、災害からのアーカイブズの救出と保存は大きな課題です。筆者は主に通訳として、2地域を架橋するための役割の難しさを痛感する機会にもなりました。

2月6日、バチカン図書館からＡ・ヌーニェス＝ガイタン修復部門長、イタリア国立アーカイブズ・図書資料保存修復中央機構からＬ・セバスティアーニ機構長、Ｅ・ヴェーカ副機構長を招聘し、国文学研究資料館にて国際研究交流集会（詳細は、高科真紀「災害国におけるアーカイブズ保存のこれから－技術交流・危機管理から地方再生へ－」『国文研ニュース』, No. 51, 2018, p. 11を参照）が開催され、被災アーカイブズのレスキュー技術を巡る多彩な議論が行われました。7日には岩手県立博物館にて、和紙等の素材でできた文化財レスキューを見学し、翌8日には、いわて高等教育コンソーシアム地域研究推進委員会が主催の「震災後の岩手県の公文書保存を考える―釜石市と遠野市の取り組み―」へ参加し、釜石市役所、釜石市旧橋野小学校、遠野市総合防災センター等を視察後、盛岡市内でのワークショップと懇親会にて積極的な意見交換が行われました。

視察では、招聘者3名とも、津波の猛威の爪痕に大きな衝撃を受けるとともに、敏速で力強い復興と、大量の水濡れ被災文書に対する正確な救出・保存措置に強い感銘を受けていました。同時に、両地域での紙の材質や保存環境、法整備の基本的な差異や、各々培ってきた技術の相違にも改めて注目していました。そして、両地域に共通の課題として、突然の災害では人命救助が優先されるからこそ、アーカイブズの救出・保存への十全な計画を事前に策定しておく必要性があると、ヴェーカ副機構長が何度も強調されたことが印象に残っています。

2地域のこの分野の牽引者達による議論は、時に白熱し濃密でした。一方で、通訳として日伊両語を媒介する難しさも実感しました。議論で溢れる言葉の取捨選択、伝えるタイミング、そして何よりも2つの異なる言語構造を媒介する難しさです。言葉は文化を構成する一部であり、言葉の違いは文化の違いと関係します。肯定表現「はい」の語１つを取ってみても、「はい」がどの程度肯定し、未来へ効力がどの程度持続するかは2地域で異なります。勿論、異なる文化圏の人の言葉だからこそ、関心を持って耳を傾けようとされますし、国際共同研究の醍醐味もここにあるかと思います。しかし、同時に、相互理解の仕方によって共同研究の効果は大きく左右されます。

従って、言葉を伝えることは、字義を超えた文化の伝達を含むことになります。個々の発言を別の言語でどう置き換えるか、時には発言の背景を理解した上で伝えることも必要です。これは、時間の懸隔を架橋しようとする歴史研究にとっても同様でしょう。ただ、即時的な対応を迫られる通訳の場では、自身の仕事への反応が目の前で可視化され、難しさをリアルに意識させられたように感じました。

同じように時空を超えた異文化の理解と伝達に関わったマレガ神父もまた、時折同様の思いに駆られたかもしれません。２月に感じた難しさを心に留めつつ、伝達の足跡としての神父のメモの翻訳に今日も頭を悩ませています。

ないじぇる芸術共創ラボ　アウトプットイベント２件開催

国文学研究資料館では平成29年度10月より、文化庁委託事業「ないじぇる芸術共創ラボ　アートと翻訳による日本文学探索イニシアティブ」を進めており、アーティスト等を招聘し、古典籍を活用して新たな芸術的価値を創出するレジデンス・プログラムを実施しています。レジデンス・プログラムは、様々な分野で活躍するクリエーターを招き、古典籍に触れたり研究者とワークショップを行ったりすることで得た感性と知見を創作活動に活かしてもらうアーティスト・イン・レジデンス（AIR）と、翻訳家を招き、まだ広く知られていない古典文学作品について研究者とともに理解を深め、他言語に翻訳して世界に発信してもらうトランスレーター・イン・レジデンス（TIR）の2つの柱があります。30年度上半期に、ないじぇる芸術共創ラボのアウトプットイベントを2件開催いたしました。

【デジタル発 和書の旅　山村浩二、蕙斎（けいさい）に逢いにゆく】

日本を代表するアニメーション作家の山村浩二さんは、昨年度からAIRのひとりとして当事業に参加しておられ、6月16日（土）に行われたトークイベント「デジタル発 和書の旅　山村浩二、蕙斎に逢いにゆく」（於・国文学研究資料館大会議室、協力・凸版印刷株式会社）で、これまでの取組みについて語ってくださいました。

山村さんは、当館の教員たちとワークショップを行うなかで、江戸時代の絵師鍬形蕙斎（くわがたけいさい）の画業に関心を抱かれました。そして蕙斎が動植物・人物などを簡略な線で描いた『略画式』シリーズ（当館所蔵。請求記号：ヤ8－127、ヤ8－123など）を模写することでその真髄に迫り、レジデンス・プログラムで創作中のアニメーション作品「ゆめみのえ」の素材としておられます。イベントの第一部では、当館の木越俊介准教授との対話のなかで、絵を生業とする山村さんならではの視点で蕙斎の作品について解説を行ったり、古典籍をご自身の作品へどのように活かしているのかについて語ってくださいました。

なお「デジタル発 和書の旅」とは、凸版印刷株式会社開発のアプリケーションを用いたイベントのシリーズ名で、山村さんの原画と古典籍とを比較したり、拡大や回転をさせて自在に資料を鑑賞することができるアプリケーションを活用しています。

第二部では、ロバート キャンベル館長および稿者とともに、蕙斎が江戸の名所を描いた絵巻『江都名所圖會（えどめいしょずえ）』（当館所蔵。請求記号：99－173）を鑑賞し、江戸時代の風俗や土地の様子に想いを馳せました。本作は上空の視点から描かれているため、来場者にも江戸の上空から風景を眺めているような臨場感を味わっていただこうと、前方に広げた原本をスクリーンに投影したり、前述のアプリケーションを用いて詳細に観察するなどの工夫を行いました。また休憩中には「ゆめみのえ」の原画と館所蔵の古典籍とを展示し、来場者と山村さんとの交流の場を設けました。

【100人ぐりっ首―英語でとる百人一首―】

これまで『百人一首』や『伊勢物語』の英訳で高い評価を受けておられるピーター マクミランさんは、TIRとして『扇の草紙』（当館所蔵。請求記号：99－73、99－151）と呼ばれる、和歌と絵画を一緒に鑑賞する形態の作品の英訳に取り組んでおられます。

7月25日（水）に開催した「100人ぐりっ首―英語でとる百人一首―」（於・立川市柴崎学習館講堂・体育館、後援・立川市教育委員会）は、マクミランさんが制作された英訳百人一首カルタ（試作品）を用いた大会です。マクミランさんは当館でのワークショップのなかで、既に翻訳された和歌についても改訂を重ねておられ、カルタにもその成果が活かされています。

当日は、立川市を中心とした中学生・高校生約30名が参加し、体育館に敷かれた60畳の畳の上で腕を競いました。マクミランさん自ら読み上げを担当し、大会はトーナメント形式で進行しました。5回の対戦を経て2名の優勝者が誕生し、マクミランさんから直筆の英訳百人一首が認められた扇が手渡されました。

また、当館の神作研（かんさく）一教授による百人一首の歴史や魅力についての解説と、慶應義塾大学かるた会の学生によるデモンストレーションが行われ、参加者たちは熱心に耳を傾けたり、華麗な技に目をみはったりしていました。

参加者の様子大会終了後、生徒たちにインタビューしたところ、参加した動機は「百人一首が好きだから」「英語が好きだから」と多々あるようでしたが、対戦に臨む真剣な様子や、目をきらきらさせながら友達の対戦を見守る様子から、生徒たちが熱心に準備に取り組んできたこと、また、百人一首が様々な人を虜にする存在であることを改めてうかがうことができました。

（有澤　知世）

和歌ワークショップ【X】2018 夏イリノイ

第10回 WAKA WORKSHOP【WWX】「EXPLORING WAKA CULTURE ACROSS GENRES, MEDIA, AND PERIODS」が、2018年８月16日（木）から18日（土）の３日間、シカゴ郊外のイリノイ州立大学アーバナ・シャンペーン校にて開催されました。世話役は、G.P. ペルシアーニ（イリノイ州立大学）と C. ラフィン（ブリティッシュコロンビア大学）の両先生。E. ケイメンス氏（イェール大学）や J. ストーンマン氏（ブリガムヤング大学）、R. トーマス氏（イリノイ大学）ほか北米の和歌研究者が一同に集い、日本からは兼築（かねちく）信行・坂本清恵・佐々木孝浩・山本真由子・海野圭介の各氏と神作が参加・発表しました。参加者は総勢35名。若手研究者による潑剌とした研究発表が多く並んだのが印象的でした。プログラム（抄）は以下の通り。

◆８月16日（木）
17:00 – 18:00　Opening remarks and book project presentation Where we are/ Where to Go From Here
G.P.Persiani（UIUC）and C.Laffin（UBC）

◆８月17日（金）
8:30 – 10:00　【Waka and Material Culture】
佐々木孝浩（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）　Waka,wahon,washi（J）
兼築信行（早稲田大学）　Kohitsu,Kaishi,Tanzaku（J）
坂本清恵（日本女子大学）　Waka Inscription and Kana Evolution（J）
10:15 – 11:45　【New Directions in Waka Research】Chair : C.Laffin（UBC）
13:15 – 14:45　【Modes of Publications】
神作研一（国文研）　The Correction and Critique of Waka as Practiced in the Edo Period（J）
山本真由子（大阪市立大学）Waka and Simitic Poetry（J）
15:00 – 16:45　【Performance,Religion,Community】
17:00 – 18:00　【Book Project Open discussion】

◆８月18日（土）
8:30 – 10:00　【Waka and Knowledge】
海野圭介（国文研）　Medieval Knowledge and Waka commentaries（J）
10:15 – 12:00　【Waka into the Modern】
G.P.Persiani（UIUC）　Waka and the Modern Nation
12:00 – 12:15　Closing remarks

成果は、和歌をめぐる最新のテキストブックとして公刊されます（今のところ英語版のみの予定）。2006年にBコロンビア大学で第１回が開かれた和歌ワークショップのいっそうの発展を祈念するとともに、今後は和歌文学会とも何らかの連携がとれたらと夢想しています。
（神作（かんさく）　研一）

トピックス

特別展示 祈りと救いの中世　　会期：10月15日（月）～12月15日（土）

仏を讃歎し往生を願う中世の人々の信仰とその祈りを言葉にのせる唱導文芸の世界をテーマとした標記の展示が当館1階展示室において開催されます。主な展示予定作品は以下の通りです。平基親願経（MOA美術館蔵等）―平基親（1151-1206以降）発願による紺紙金字写経。『法華経』法師品で説かれる華・香・瓔珞・抹香・塗香・焼香・絵蓋・幢幡・衣服・伎楽に合掌を加えた十種供養の様を見返しに描く名品です。国宝 転法輪鈔（神奈川県立金沢文庫蔵）―安居院澄憲（1126-1203）の説法の巧みをうかがい知る重要資料。後白河天皇（1127-92）時代前後の仏事で唱えられた表白（法会の趣旨を述べる美文。当時第一級の文学でした）を収めます。また、重要文化財 往生要集（最明寺蔵）、重要文化財 江都督納言願文集（国立歴史民俗博物館蔵）、宝物集（瑞光寺蔵）、肝心集（真福寺蔵）、維摩会表白（上野学園日本音楽資料室蔵）、澄印草等（当館蔵）、多田満中（京都大学蔵）、月詣和歌集（伝西行筆相輪寺切）、紫式部石山寺詣図（ともに宮内庁書陵部蔵）など。　　（海野　圭介）

『観普賢経』（平基親願経）センチュリー文化財団蔵

転法輪鈔 国立歴史民俗博物館蔵

〈新収〉庵逧巌旧蔵資料の紹介

庵逧巌氏（1930-79）の旧蔵書132点が、ご令室美根子さまのご厚意により、このほど国文学研究資料館に寄贈されました。＊一般コレクションとして「庵逧巌旧蔵資料」と命名。一部に明治印本を含む。

庵逧先生は中近世の芸能の研究者で、元山梨大学教育学部助教授。その御仕事は、没後に編刊された論文集『幸若舞・歌舞伎・村芝居』（勉誠出版、2000）にまとめられており、他にも『歌舞伎台本目録』（共編、阪急学園池田文庫、1970）、『村芝居考―奥播磨を中心に』（近畿民俗刊行会、1970）、『国語科教育学の性格』（明治図書出版、1981。＊遺稿集）などの編著があります。

蔵書中の優品は、『比丘尼縁起』（〔江戸前期〕写・1巻。＊本号「表紙」ならびに「表紙絵資料紹介」（恋田知子執筆）参照。現在、特別展示「祈りと救いの中世」にて陳列中）と『太元次第』（〔江戸前期〕写・1巻）ですが、これ以外にも『往生礼讃偈』（〔寛永頃〕刊・大1冊）や『中将姫行状記』（享保15年刊・大7冊）、『広足道の記』（〔江戸後期〕写・1冊。＊いわゆる『東路日記』）など、興味深い資料を含みます。

国文研では、かつて1975年に徳田和夫助手（当時。現 学習院女子大学国際文化交流学部教授）が庵逧邸に赴いて調査した『比丘尼縁起』と『太元次第』、2点の調査カード（Cカード）ならびにそのマイクロフィルムを所蔵していますが、他の資料も含めて順次デジタル撮影し、公開してゆく予定です。

なお、このたびの御寄贈にあたっては、庵逧美根子令夫人はもちろんのこと、ご令嬢の服部祐子氏とご令孫にあたる服部徹也氏（慶應義塾大学大学院修了・大谷大学助教・日本近代文学専攻）にもたいへんお世話になりました。格別のご厚情を賜りましたことに心から感謝し、改めて篤く御礼を申し上げます。また、わたくしどもを庵逧邸へと導いて下さった小川剛生氏（慶應義塾大学文学部教授）にも感謝と御礼を申し上げます。

（神作　研一）

中高生向けの講演会・展示を国立国会図書館国際子ども図書館とのコラボで開催！

8月2日（木）に、東京上野公園にある国立国会図書館国際子ども図書館において、当館との共催で中高生向けの講演会「図書館で！ネットで！楽しい古典籍―おいしい江戸料理本の世界」が開催され、多くの中高生の皆さんや市民の方が参加されました。

会場となった国際子ども図書館は、もとを辿れば帝国図書館として、明治39年（1906）に当時の日本の技術の粋を集めて造られたルネッサンス様式の洋館でした。平成の工事で、旧建物の内外装の意匠と構造を可能な限り生かしながら、ガラス部分の増築、免震化などが行われ、新旧（ガラス館／レンガ館）が共存する建物へと再生されたのです。今でも前景部分などに創建当時の面影をみることができる瀟洒な図書館なのです。

2016年9月30日に当館と国立国会図書館との間で連携・協力に関する協定を締結しましたが、今回のコラボ企画はその一環としておこなわれたもの。当館からは、講師の派遣だけではなく、所蔵する古典籍などを出張展示し、中高生の皆さんに古典籍の楽しさに触れてもらう機会となりました。

8月2日の中高生向け講演会は、増設されたアーチ棟1階研修室で午後2時から4時までの開催。「おいしい江戸料理本の世界」と表題にあるように、江戸時代に刊行された料理本や浮世絵を題材にし、書物などから読み取れる江戸時代の食文化について、当館教員が講師となり、画像中心に作成されたパワーポイントを用いて紹介しました。江戸時代の人はどんな風に食べていたのかを探す上では何よりも浮世絵や当時の書物が手がかりになること、当時の料理が一汁三菜といった本膳料理が基本形であること、江戸時代の料理本独特の創意工夫のある記述方法、季節や時代ごとのお菓子のあり方などを紹介しました。食文化のめまぐるしい変遷のなかで、テーブルでの食事が普通となった中高生の皆さんにとっては、江戸時代の食のありようは新鮮に映ったのではないでしょうか。

当日の東京都心の気温が37.3度と、猛暑日になり、高温注意情報が発表されるなかで参加者が集まるのか大変危惧されましたが、中高生を含む67名もの方が集いました。中高生向けの講演ということもあり、途中で休憩を挟んでの講演でしたが、皆さん熱心にメモを取りながら聴き入ってくださいました。講演後のアンケートでも、概ね好評で、講師が持参した江戸料理本（複製）などを熱心に眺める高校生もいたほどです。

「図書館で！ネットで！楽しい古典籍」と表題にあるように、講演のもう一つの目的に図書館の利用、インターネットの活用方法の紹介があります。当館が進めている歴史的典籍NW事業や、CODHからダウンロードできる1700点もの古典籍データセットのこと、くずし字学習のためのアプリの紹介とともに、国際子ども図書館からは同館の書籍を利用してのブックトークもなされ、充実した一時を過ごすことができました。

併催イベントとして、同館レンガ棟2階調べものの部屋の一角で、7月24日から8月9日までの15日間（月曜は休館）、当館が所蔵する『料理物語』『豆腐百珍』『万宝料理秘密箱』等の江戸の料理本原本のほか、菓子看板や菓子型、菓子双六など、17点が出張展示されました。来館者にとっては、江戸時代の資料を間近で見ることが出来る貴重な機会となったことでしょう。

今般公示された「高等学校学習指導要領」（2022年4月から施行予定）と「高等学校学習指導要領解説」を確認するに、「古典、武道、伝統音楽、美術文化、衣食住の歴史や文化に関する学習を充実」「情報化社会の進展を見据え、国語科の学習においても、情報収集や情報発信の手段として、インターネットや電子辞書等の活用、コンピュータによる発表資料の作成やプロジェクターによる提示など、コンピュータや情報通信ネットワークを活用する機会を設けることが重要である」と記載されています。今回のような講演と出張展示といった取り組みを、今後もっと各地に拡げていくことで、教科書だけでは窺い知れない古典籍のもつ楽しさを中高生の皆さんにも知ってもらう一助となればと構想したのでした。

第 42 回国際日本文学研究集会プログラム

第 42 回国際日本文学研究集会

日　　時：平成 30 年 11 月 17 日（土）～ 11 月 18 日（日）
主催・会場：国文学研究資料館（東京都立川市緑町 10-3）
参　加　費：無料・当日受付

平成 30 年 11 月 17 日（土）

受 付 開 始 …… 12:30～
　総合司会　海野（UNNO）　圭介（Keisuke）（国文学研究資料館准教授）
開 会 挨 拶　ロバート（Robert）　キャンベル（CAMPBELL）（国文学研究資料館長）…… 13:00～13:10

【第 1 セッション】　司会　野網（NOAMI）　摩利子（Mariko）（国文学研究資料館准教授）
研 究 発 表
[1]『佳人之奇遇』における范卿という人物をめぐって
　陳（CHEN）　華栄（Huarong）（東京大学総合文化研究科外国人研究生、東西大学博士課程）…… 13:10～13:40
[2] 島尾敏雄『死の棘』の構成の一面：
　草稿から作品への第四章「日は日に」の作成過程
　MAUFROID　Yannick（フランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO) 博士課程）…… 13:40～14:10
[3] 日本占領下のインドネシアにおける菊池寛「父帰る」
　―ウスマル・イスマイルの戯曲翻案をめぐって
　FITHYANI　Anwar（筑波大学大学院博士課程）…… 14:10～14:40

休憩（20分）　14:40～15:00

【ショートセッション 1】　司会　ダヴァン（DAVIN）　ディディエ（Didier）（国文学研究資料館准教授）
① 幸田露伴と近代中国知識人に関する試論―「墨子」の受容を手掛かりに―
　梁（LIANG）　鎮輝（Zhenhui）（宇都宮大学大学院博士課程）…… 15:00～15:15
② 佐藤惣之助『琉球諸嶋風物詩集』における古琉球
　許（XU）　圓圓（Yuanyuan）（広島大学客員研究員、黄岡師範学院助教、北京語言大学博士課程）…… 15:15～15:30
③ 中上健次の『千年の愉楽』における「ラテンアメリカニズム」
　CHIAPPE　IPPOLITO　Matías（早稲田大学大学院博士課程）…… 15:30～15:45
④ 村上春樹の〈変身〉―『恋するザムザ』論
　林（HAYASHI）　圭介（Keisuke）（法政大学中学高等学校専任教諭）…… 15:45～16:00

休憩（20分）　16:00～16:20

【ショートセッション 2】　司会　中村（NAKAMURA）　ともえ（Tomoe）（静岡大学教育学部准教授）
⑤『鸚鵡返文武二道』のハンガリー語訳―黄表紙のエッセンスをどう伝える？
　CSENDOM　Andrea（国際交流基金フェロー（中央大学））…… 16:20～16:35
⑥ 古典文学は世界遺産になりうるか―日本研究と文化遺産学の学際的な試み
　GERLINI　Edoardo（早稲田大学文学学術院訪問学者、ヴェネツィア・カフォスカリ大学研究員）… 16:35～16:50

平成 30 年 11 月 18 日（日）

受 付 開 始 …… 9:30〜
総合司会　齋藤（SAITO）　真麻理（Maori）（国文学研究資料館教授）

【第２セッション】　司会　河野（KONO）　貴美子（Kimiko）（早稲田大学文学学術院教授）
研 究 発 表
[4]　知の不安定性の力：藤原清輔と藤原俊成の歌論と和歌の分析からみた中世における『万葉集』の受容と摂取について
CITKO　Malgorzata　Karolina（フロリダ州立大学ポスドク）…… 10:00〜10:30
[5]　西洋における西行受容の一事例―ヴィッラーニ・ゲー・アンドラーシュ『反射』の場合―
FITTLER　Áron（大阪大学日本語日本文化教育センター非常勤講師）…… 10:30〜11:00
[6]　意図された誤読　― 荻生徂徠の「水足氏父子詩巻序」の矛盾、そして朝鮮
李（LEE）　暁源（Hyowon）（東京大学大学院人文社会系研究科特任准教授）…… 11:00〜11:30
[7]　清水市次郎出版の『絵本通俗三国志』の挿絵についての考察
梁（LIANG）　蘊嫻（Yunhsien）（元智大学応用外国語学科アシスタント・プロフェッサー）…… 11:30〜12:00

休憩（105分）　昼食・ポスターセッション　12:00〜13:45

【ポスターセッション】　平成30年11月18日（日）　12:00〜13:45
※11月17日（土）13:00から11月18日（日）15:00まで掲示しています。

●〈越境文学〉と〈日本文学〉―シリン・ネザマフィの「サラム」をめぐって―
CLAUDEL　Sophie（法政大学大学院博士課程）
●絵入狂言本考―台帳や役者評判記との比較から―
髙橋（TAKAHASHI）　俊彦（Toshihiko）（埼玉大学大学院修士課程）
●中国における日本近現代小説の受容研究：1972〜1978年
苗（MIAO）　鳳科（Fengke）（中央大学大学院博士課程）
●文語文を素材とした国際共修授業―正岡子規『はて知らずの記』を読む―
虫明（MUSHIAKE）　美喜（Miki）（宮城教育大学特任准教授）／佐藤（SATO）　勢紀子（Sekiko）（東北大学教授）
●水村美苗の『本格小説』におけるノスタルジア―『嵐が丘』との比較―
皆本（MINAMOTO）　智美（Tomomi）（摂南大学外国語学部准教授）
●『源氏物語』『紫式部日記』における仏教関連用例とそのデータ化
春日（KASUGA）　美穂（Miho）（大正大学教育開発推進センター専任講師）／小菅（KOSUGE）　あすか（Asuka）（國學院大學大学院博士課程）／
髙倉（TAKAKURA）　明樹子（Akiko）（國學院大學大学院博士課程）

【シンポジウム】　「いくさの表象」　司会　櫻井（SAKURAI）　陽子（Yoko）（駒澤大学文学部教授）
司 会 挨 拶 …… 13:45〜13:50
パネリスト発表
①戦争と文学―表象としての深い絆―
中川（NAKAGAWA）　成美（Shigemi）（立命館大学特任教授）…… 13:50〜14:20
②近代日本における元寇図と〈蒙古襲来絵詞〉の図像の伝承
金（KIM）　容澈（Yongcheol）（高麗大学校グローバル日本研究院教授）…… 14:20〜14:50
③端麗なる戦場―軍記物語のいくさの表象とその来由についての試論―
大津（OTSU）　雄一（Yuichi）（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）…… 14:50〜15:20

休憩（15分）　15:20〜15:35

パネルディスカッション …… 15:35〜16:25
まとめ …… 16:25〜16:30

総括 …… 16:30〜16:45

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○日本文学研究専攻　在学生へインタビュー

Q1　博士課程として総研大を選んだ理由は何ですか

・国文研は全国の大学や諸機関と比較しても、特に資料に恵まれています。

・写本･版本などたくさん所蔵され、図書や学術雑誌も充実していて、都心の大学よりも通いやすいです。

Q2　入学してみて入学前に想像したことと違った点はありましたか

・資料の利用や収蔵書庫の活用、院生室の環境など、想像していた以上に恵まれていました。

・キャンパスライフというよりは、研究所という感じです。（慣れてくると研究に集中できます）

Q3　総研大の特色でもある指導教員３人による指導体制についてはどう思いますか

・それぞれ専門の異なる先生から指導していただけるので、質問内容に合わせてそれぞれの先生に質問ができ、様々な視点から意見を伺えることは、非常にありがたいです。

・３人に限らず大勢の先生とのつながりが持てることは良いことだと思います。

Q4　大学行事には参加しましたか

・昨年の総研大文化フォーラム＊に実行委員として参加しました。専門が異なる学生との交流から新たな視点が得られ、自分自身の研究にとっても有益でした。

・同じく総研大文化フォーラムに参加し、口頭発表しました。今年は実行委員として参加します。

(*)「総研大文化フォーラム」は、「文化」を共通の切り口とした、多様な専門分野を持つ学内外の教員と学生の学際的な研究発表の場です。学生の研究活動・成果の発表そのものや、研究発表スキル指導の教育的側面もあり、フォーラムの企画・運営を主体的に担うことによって実践的な問題解決能力を身につけることが期待されます。今年は「国立民族学博物館」を会場に11月23日～24日に開催されます。

Q5　学生生活・研究活動・その他総研大について感じていることを教えてください

・学生同士での研究についてのディスカッションやもっと多くの交流ができるようになりたいです。

・研究環境の整備充実に力を入れていただいて感謝しています。

○ 2019 年４月入学　学生募集　＜学生募集要項を配布中＞

2019年度の入学者を募集します。

恵まれた研究環境のもとで研究に専念できる日本文学研究専攻への出願をお待ちしています。

【日本文学研究専攻　2019年度募集概要】

・募集人員　　：博士課程の後期3年の課程　3人　　・取得できる学位　：博士（文学）

・願書受付期間　：2018年11月22日（木）　～　2018年11月29日（木）

学生募集要項等の資料請求や、当専攻についてのお問い合わせの連絡先

国文学研究資料館総務課教育支援係　　E-maill：edu-ml1@nijl.ac.jp　TEL：050-5533-2915

文化科学研究科の概要

総合研究大学院大学文化科学研究科は、人間の文化活動並びに人間と社会、技術及び自然との関係に係る総合的教育研究を行い、国際的通用性を持つ広い視野を備えた高度な研究者及び高度な研究能力を持って社会に貢献する人材の育成を目的としています。

日本文学研究専攻の概要

従来、書誌的側面と解釈的側面とに分化して発展してきた日本文学研究を、文化科学の視点から総合的にとらえ直し、それぞれの文学史現固有の実態、作品の形成・享受の動態、文学を文学たらしめてきた制度・環境等の視角から相互に照射する総合的文学研究を行います。

国文学研究資料館に集積された膨大な資料を活用しながら専門的な調査・分析を進める能力とともに、そうした専門性を相対化する広い視野・国際感覚を併せ持った、先進的な日本文学研究者を養成します。

詳細は WEB サイトもご覧ください。　http://www.nijl.ac.jp/~kyodo/soken.files/enter/outline.html

閲覧室カレンダー　2018年11月～2019年1月

■青は休館日　■黄色は土曜開館日

11月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

12月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23/30	24/31	25	26	27	28	29

1月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

●開館：9：30～18：00　●請求受付：9：30～12：00，13：00～17：00　●複写受付：9：30～16：00

ただし、土曜開館日は、

●開館：9：30～17：00　●請求受付：9：30～12：00，13：00～16：00　●複写受付：9：30～16：00

展示スケジュール（11月～1月）

特別展示「祈りと救いの中世」
　会期　2018年10月15日（月）～12月15日（土）
通常展示「和書のさまざま」
　会期　2019年1月15日（火）～9月中旬（予定）
※休室日
　日曜・祝日、展示室整備日
　（11月14日、2月13日、3月13日）

大学支援「国文研でゼミを」　大学教員の皆様へ

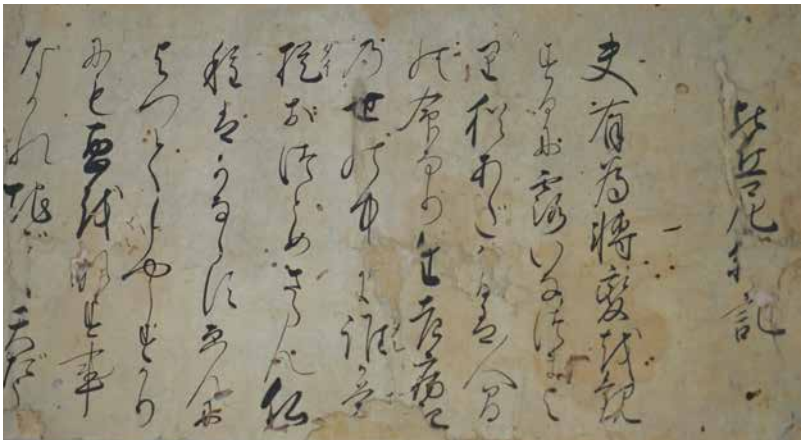
国文学研究資料館のゼミ室で、豊富な所蔵資料を利用しながらゼミや講義を行うことができます。

※学部・大学院で行っている日本文学や日本史の授業が対象となります。

◆詳細は当館WEBページをご覧ください。
https://www.nijl.ac.jp/activity/education/shien.html

表紙絵資料紹介

『比丘尼縁記』　〔江戸前期〕写。一巻。15.0×638.0cm。



室町末期から江戸時代にかけて、地獄と極楽の絵解きをしながら諸国を遍歴し、熊野三所権現の信仰を広めたとされる熊野比丘尼の縁起。天竺、本朝における比丘尼の起源に始まり、熊野三山の比丘尼の縁起を詳述する内容で、他に伝本を聞かない孤本。釈迦の叔母憍曇弥や百済の法信比丘尼、本朝の光明皇后について語り、弘法大師の母の説話から三山の比丘尼縁起を説き明かす。悪業の女人を導き、熊野三山霊場の修造のため、諸国を勧進して一紙半銭の浄財を募ることを熊野比丘尼の本旨としており、末尾には三山の本地と垂迹の仏神名、寺院名を列挙する。なお、巻末の紙背には社殿や僧侶が墨線で描かれており、同時代の書写かどうかは判断し難いものの、本縁起の伝来を考える上で注意される。

2018年7月に当館へ寄贈された庵谿巖氏旧蔵資料の一点。2018年10月15日から12月15日まで、当館開催の特別展示「祈りと救いの中世」にて、熊野比丘尼らが絵解きしたとされる「観心十界図」（圓福寺蔵）とともに陳列中。ぜひ実物をご覧ください。

（恋田　知子）

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8606

国文研ニューズNo.53
発行日　平成30（2018）年10月15日
編　集　国文学研究資料館企画広報室
印刷所　株式会社　アズディップ
©人間文化研究機構国文学研究資料館

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。